

臓器移植を考える市民公開講座
2016年11月20日(日)神戸市勤労会館

「妻が、今も誰かの人生を支えている」
五十嵐利幸氏（実名）

兵庫県臓器移植推進協議会
事務局長 川瀬 喬

本年11月20日(日)神戸市勤労会館において、臓器移植を考える市民公開講座を開催しました。当日は、福井新聞社(事業参与)の五十嵐利幸さん(66歳)に『妻が、今も誰かの人生を支えている』と題して、講演して頂きました。突然、脳死になられた奥さんの生前の臓器提供の意思を思い出し、その意思を生かそうと、提供に向けた親族間の葛藤と承諾に至るまでの経緯、および、その後の移植の啓発活動について約1時間20分、実名を使い参加された皆様方(75名)に語りかけられました。今回の市民公開講座は、兵庫県臓器移植推進協議会主催、兵庫腎疾患対策協会、NPO 法人兵庫県腎友会、NPO 法人日本移植者協議会、および兵庫腎移植の会の共催でした。

～ 五十嵐利幸さんのご講演要旨 ～

1. 臓器提供に至るまでの経緯

今から6年前、講師は勤務中に妻の交通事故の連絡を受け、病院に駆けつけると、主治医から奥さんはくも膜下出血が原因で脳死状態と告げられた。彼女は保健体育の教師をされていて、体の弱い子など弱者への理解が深く、自分に何かあった時は『臓器提供をしてね』と家族に伝えられていた。講師は、彼女の臓器提供の意思は、残された家族へのミッション(使命)と考え、脳死下の提供を申し出られた。

妻の両親、取分け義母が提供に強く反対していたが、連日、親戚の警察官が彼女の説得を続け、提供の承諾までこぎ着けた。

その後、法的脳死判定などを経て、脳死下での福井県人初の提供(肺臓、すい臓、腎臓、角膜)となった。

脳死下の臓器提供に関し、脳死判定のシミュレーションの度ごとに、コーディネーターから臓器提供の意思を確認されたことに、その折の緊張感や手続きの煩雑さなどで、気持ちがゆらいだこともあった。

提供後、『腎臓を移植した患者から10数年振りに排尿を実感した旨の連絡が入り、講師は、妻がまだ生きてると実感された。

また、妻の身体の全部が茶毘にふされることなく、患者の体の中で(妻の)臓器が生き続けている。患者の方に臓器を受け取ってもらい、素直な気持ちとして感謝していると述べられた。

更に、提供後、わが国の移植医療がなかなか進まない現状を知り、臓器提供の講演などを通じて、臓器移植の啓発活動をする様になった。

2. 実名報道について、

講師は、実名報道について、メディアを通じて人々に共感をしてもらうことが何より大切だと思う、と話された。かつて、川田龍平君(当時 19 歳)は薬害エイズ問題で、カメラの前で実名を出し、エイズの実情を訴えられた、と述べ、自分の実名を出すことで、臓器移植も一般の人々が理解するだけでなく、共感しなければ何も変わらないのではないかと説明された。

講師は、改正法施行 4 年後の 2014 年の死後の臓器提供件数が 77 例まで減少。講師と仲間(移植者など)たちは、我が国の移植の現状に憂慮し、臓器移植のキャンペーンを名古屋市で行って来た。その折、移植の普及・啓発に一役を担わなければと考え、自分が自己責任で出来る事として、中日新聞を通じて実名報道に踏み切った、と説明。

その年の新聞協会主催の新聞報道に関する感想文コンクール(全国から 20,000~30,000 作品)で、三重県津の女の子(中村さん)が講師の実名報道の記事の感想文を応募されて、最優秀賞を取られた。自分自身の実名報道で読者のお子さんから反応があったことを知り、自分の思い(気持ち)が届いたと思われた。

3. 移植患者たちとの交流と臓器提供について

講師は、奥さんの臓器提供後、移植の啓発活動の一環として、日頃から名古屋市や九州の移植患者との交流をされていて、臓器移植に関する個々人の悩みについても理解を示された。

最後に、講師は、参加された方たちに生と死の問題と臓器提供について、一度、ご家族で身近な「いのちの問題」が起きた時、自分ならどうする、家族ならどうする、という話し合いを通して、身近にいのちを感じたり、考えてもらう機会を持って頂けたらと話された。ひいては、そのことが、わが国の今の移植医療の現状を少しでも変えるキッカケになればと述べられた。

